九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

文心雕龍（七）

目加田，誠

https://doi.org/10.15017/2555020

出版情報：文學研究. 62, pp.47-58, 1963-09-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

文心雕龍（七）

目加田　誠

練字第三十九

およそ鳥の足あとにならって、ものを書く形が作られてから、結縄の法は変移して、文字がかき並べられるようになった。この文字こそ、言語の顔かたちであり、文章がその身を托する住居である。

注　易繫辞下に、「上古は縄を結んで政治をとったが、後世の聖人が之を文字に改めた」とある。又呂氏春秋君守篇に、「蒼頡書を作る」とあり、その高誘注に、蒼頡が鳥の迹に仿って文章を造ったといっている。許慎の説文解字の叙に「黄帝の史蒼頡、鳥獸蹏迒の迹を見て、分理の相別異すべきを知り、初めて書契を作る」とあるとおり。

蒼頡が文字を造ったとき、鬼神は哭泣し、天は粟を雨降らせた。

注　淮南子本経訓に見えている。論衡感応篇には、蒼頡が文字を作ったとき、天が粟を雨ふらせ、鬼が夜哭したというのは、文字が興ると、やがて乱が兆ざすからだと言っている。しかしもともとこの伝説は、文字というものの働らきの神秘さを強調したものであると思う。

黄帝はこの文字を用いて、百官がよく治まり、民情も明らかになった。先王が民を教化するには、必ず天下の文字を同うし、輶軒使者は各国の異なる言語を奏上した。それは字体を同一にし、異音を統一しようとしたものであった。

注　説文序に「分れて七国と為り、言語は声を異にし、文字は形を異にす」とある。輶軒は軽車。古代天子の使臣は輶軒に乗った。風俗通の序に、「周、秦、常に歳の八月を以て、輶軒の使を遣わし、異代方言を求む」とあり。

周礼の保氏は六書を教えることを掌った。

注　周礼地官保氏の条に「乃ち之に六芸を教う。……五に曰く六書。」と。六書とは鄭衆注に「象形、会意、転注、処事、仮借、諧

声」。説文解字叙には、「保氏国子を教うるに先ず六書を以てす。一に曰く指事。指事とは視て識る可く、察して意を見る。上下是なり。二に曰く象形。象形とは其物を画き成し、体に随って詰詘す。日月是なり。三に曰く形声。形声とは事を以て名と為し、譬を取って相成す。江河是なり。四に曰く会意。会意とは類を比し、誼を合し、以て指撝を見わす。武信是なり。五に曰く転注。転注とは類を建て首を一にし、同意相受く、考老是なり。六に曰く仮借。仮借とは本と原字無く、声に依り事を託す、令長是なり」

秦は古来の典章を滅ぼし、役人を以て師とさせた。李斯はそれまでの籀文を削って、秦の小篆という字体を作り、程邈は隷書を造り、かくて古文はすたれた。

注　史記始皇本記に、天下に私蔵する詩書百家の書物を悉く焼かせ、今後若し法令を学ぼうとするものがあれば、役人を先生とせよと命じたことが載っている。説文序に、「秦の始皇帝が初めて天下を統一したとき、丞相李斯が天下の文字を統一すべきことを奏上し、秦の文字と合わぬものをやめさせた。そこで李斯は蒼頡篇を作り、中車府令趙高は爰歴篇を作り、大史令胡母敬は博学篇を作った。皆史籀の大篆を取って之をだいぶ簡単な形に改めた。これが所謂小篆である」と言っている。又隷書というのは程邈が獄中で案出したものとも伝えられ、又秦の時に官獄多事であったため、篆体を更に簡単にして、役所事務の用に立てたものとも言われ、要するに篆体を省いて簡単にした字体である。

漢の初めに律令を起草して法を定め、太史は学童に六体を教え試みた。又役人などが上書するとき、その文字が誤まっていたら、すぐに弾劾された。だから馬の字が一画缺けたからといって、石建が死罪を懼れたという話は、彼の性格が敬慎であったからとはいえ、やはり当時文字を重んじたからである。

注　漢書芸文志に、「漢興って蕭何が律を起草し亦その法を著して曰く、太史は学童を試み、よく九千字以上が読めるものであって始めて役人とする。又六体（古文、奇字、篆著、隷書、繆書、蟲書）を試験し、最もよく出来た者を尚書御史、史、書令史とする。吏民の上書の字が正しくなかったときは之を弾劾する」とある。漢書石奮伝に「長子建は郎中令となったが、上奏の文章が下げ渡しになって来たのを読んで、驚ろき恐れて「馬の字は尾と合せて五点になる筈。これは四つしかない、一つ足らぬ。死罪を得るのではなかろうか」、と言ったことが出ている。史記列伝にも見えていることである。

武帝の時代になると、司馬相如が凡将篇を著わした。宣帝成帝の二帝の世に及んで、文字の学に詳しいものを召し集め、張敞は（蒼頡

篇の）正しい読み方を伝え、楊雄は奇字をあつめて訓纂篇を作った。いずれもよく雅頌に熟達し、文字の音と意義をしらべつくしていた。凡そ大文章をものする人々は、皆之に通暁せざるはなかったのである。

注　張敞は宣帝の時の人であるが、揚雄が訓纂篇を著したのは平帝の時だから、この宣成二帝は或は宣平二帝の誤かと范文瀾は云っている。

又貫練雅頌の頌は誦字の誤かとも云っているが、そうすると雅誦となり、爾雅、蒼頡篇を意味することになろう。

説文序に曰く、「孝宣皇帝の時、蒼頡の読に通ずる者を召し、張敞従って之を受く。涼州の刺史杜業、沛人爰礼、講学大夫秦近亦能く之を言う。孝平皇帝の時、礼等百余人を徴し、文字を未央の廷中に説かしめ、礼を以て小学元士と為せり。黄門侍郎揚雄采って以て訓纂篇を作る」とあり。

それにまた屢々ば都会や園囿を賦するのに、、いろいろな形や声を仮りて文字を作った。故に前漢の文字学には奇字が多いが、ことさらめずらしいものを並べたのではなく、一般に暁りがたいものが多かったからである。

後漢になると、文字の学問は次第に疎くなり、或は文字を分けて解釈したり、字形にかくされた意味を求めたりして、面白いものもあるが、非難さるべきものも多い。

魏の時代の文章になると、文字の用法に一定の法式があり、彼らは漢の作品をふりかえって、むしろ難解で深奥であると認めた。だから陳思王曹植は、漢の楊雄司馬相如の作品は、趣旨が深すぎて、師承がなければその文辞の解釈をすることができず、博学でなければその内容をつかむことができぬ、と言っている。それは決して単に才能が隔絶している故のみではない。だいたい文字が難しかったのである。

注　曹植の語の出所は不明。

晋以来の用字はおおむね簡易となった。その時代は皆易きを求める習わしで、誰も好んで難しい文字を用いようとはしなかった。今や一字でも見馴れぬ字があれば、すべての句が人を驚かすものとされ、三人の人の識らぬ字があれば、字妖とでも言われたろう。本来むつかしい字でも、後世の人が誰でも知っているものなら、それは易しいという訳だし、もし本来易しい字でも、当代すでにすたれて了った字は、今では難しいというわけだ。文字の難易について取捨することは充分よく察せねばなるまい。

およそ爾雅というものは、孔門の徒のあつめたもので、詩経書経に附帯する字書である。蒼頡篇は李斯があつめたもので、古文籀文の

遺体である。爾雅は訓詁の淵源だし、蒼頡篇は奇字の園囿である。この二つを以て、体を異にしつつも互に助けとすること左右の肩股の如く、旧きをそなえて新らしきを知るもとでとするならば、亦文章を為ることができようというものだ。

さてはまた文字の意義に古今の差があり、或は今に行われるものと廃れたものとがあり、字形に簡単なものと複雑なものとがあり、または字体に美醜がある。心の声は言語にあらわれ、言語は文字によって現わされる。諷誦の効果は音調にあり、作文の働らきは字形によるものである。

そこで文章をつづるのには必ず文字を択ばねばならぬ。一に詭異を避け、二に聯辺を省き、三に重出を稀(はか)り、四に単複を調のえる。

詭異とは字体の怪奇なものである。曹攄の詩に、「豈不願斯遊、褊心悪凶噂」というのがあるが、この凶噂の二字の詭異さは、この美事な一篇の大きな疵となる。況んやこれに過ぎたるものはとても見るに足らぬ。

注　曹攄字顔遠。その詩は文選に五言二首、文館詞林に四言長篇五首、そのほか一首が、全晋詩に収められているが、ここに引用する詩は見当らぬ。

聯辺とは字の半ば（偏傍）が同じもの。山川の形容などには古来皆用うることだが、平生の文に用いては、不調和で瑕瑾となる。止むを得ぬときはまず三字連属までそれ以上はもう字引きだというべきだろう。

注　黄注に、「三接とは張景陽の雑詩の洪潦浩方割とか、沈休文の和謝宣城詩の別羽汎清源とかの類だ。三接以外というと曹子建の雑詠の綺縞何繽紛とか、陸士衡の日出東南隅行の瑤珮結瑤瑳とかで、五字の中偏傍の同じものが四つもあっては、字引きのようだという譏りを免れぬ。但し賦であれば十も二十もつづけることがある。」といっている。賦に於て、山川、宮殿、園囿を形容するときなど、偏傍を同うするものを殊更に並べるのは、文字の知識をほこると共に、人の視覚に訴えようとするものもあるであろう。事実賦の作者は同時に字書の撰者である例が乏しくないのである。

重出とは同字重復して相犯すもの。詩経や楚辞はただ意のおもむくままに重出もかまわず詠っているが、近世は同字を重ねて用いることを忌む。もし両字倶に大切だというときは、むろんなにも相犯すということはないが。故にすぐれた作者は、万篇を成すと雖も、その一字に苦しむ。一字が乏しいのではない。重出相犯を避けるのがむつかしいのだ。

単複とは、字形の肥瘦をいう。瘦せた字形の句がかさなると、その行は細く薄くして弱く、肥えた字形の文字が重なると、その篇は暗く濁ってしまう。よく文字を参酌して用いる者は、字形の単複を交互にし、美しい真珠を重ねたようにするものである。

凡そこの四条は、文章に必ず有るというわけではないが、しかもこういう体例が無いではない。それを若し気づかぬようでは充分に文章を理解したものとは言えまい。

以上文を作るときは、文字を選んで、余りに奇怪な文字を用いぬこと。同じ偏傍をいくつも重ねぬこと。（但し賦の場合は別）。同字を重ねて出さぬこと。字形の肥痩を適宜にまじえること、を言う。漢字を用うる文章の、視覚に訴える要素を考えているのである。経典はその趣旨が隠曖で明かならず、書札はいり乱れ易く、竹簡は虫くい易く、絹帛は裂けやすく、三たび写す間に文字はかわる。

注　抱朴子遐覧篇に、諺に曰く、書三たび写せば、魚は魯となり、帝は虎となる」

或は音で訛り、或は文字の相似で誤まる。子思の弟子孟仲子が周頌の於穆不已を於穆不祀としたのは音が同じところから訛ったのだ。晋の史記に、三豕渡河とあるのは、己亥渡河の文字が謬ったのだ。

注　呂氏春秋察伝篇「子夏晋にゆき、衛を過ぐ。史記を読む者あり、曰く、晋師三豕河を渉ると。子夏曰く、非也。是れ己亥なるのみ。夫れ己と三と相近く、豕と亥と相似たり。晋に至って之を問えば、則ち曰く、晋師己亥河を渉るとなり。」

尚書大伝には「別風淮雨」とあるが、帝王世紀には列風淫雨となっている。別と列、淮と淫は字形が似ていてまぎれたのだ。淫、列とすれば、意味はあたり前で不思議はない。淮、別とすると意味は理に叶わぬが、ことばは目新らしい。だから傅毅が靖王興の誄を書いたとき、すでに淮雨（白日幽光、淮雨杳冥）を用いている。まことに新奇を愛する心は古今同じきことを知る。しかし疑わしいことを欠いて言わぬは聖人の慎しんでつとめたところである。もし正常な立場をとって、徒らに新奇を追わぬようにすれば、始めて正しい文字を用いることができよう。

賛に曰く、隷は篆の形からその体が作られ、蒼頡と爾雅はそれぞれ文字の訓詁をした。古今の字形は各々異なり、美醜それぞれの体がある。文字が弱いと流れ易く（原文異流。董侃云――異当作易）嶮しいと用い難い。音と形が明らかで正確であれば、文の光采はかがやき躍るであろう。

注　章句篇に云う、「字に因って句を生じ、句を積んで章を成し、章を積んで篇を成す。篇の彪炳たるは章に疵無きなり。章の明靡なるは句に玷無きなり。句の清英なるのは字の妄ならざるなり」とあり。練字とは文字をえらぶことである。この篇は始めに文字の変遷をのべ、漢代に於いていかに文字が重視されたかを語る。ついで魏晋以来文字が漸く簡に赴いたことをいう。中国の文字の

数は康熙字典に収められたものは四万数千あるが、その中の大多数は今日已に用いられることがない。劉勰の当時でも、もはや漢賦に現われる特殊な、奇異な文字は一般に用いられなかった。乃で彼は、もはや世に用いられぬような奇怪な文字を今日使用することに反対したもののようである。文字の音と文字の形は、文章を耳できき目で見るに直接な関係をもつ。声律のことはすでにのべた。ここは字形の単複、美醜を論じ、重出をいましめ、偏傍の同じきものの畳用を注意する。何れも文章に於ける文字の視覚的要素に関する考究である。且つ文字を用いるのに、徒らに奇を好んで往々に正しい意義を失うものがあるのを云い、文を作るに用いる文字は、奇を追わず、正しい用法をなす可きことを説いたのである。人の使わぬ字を好んで用いぬこと。それは文をわかり易くするためである。文字の形をえらぶこと、それは文章の字面を美しくするためである。ここに象形文字、表意文字を用いて書く文章の特殊な考慮があるのである。

隠秀第四十

およそ心の働きはその動きが遠く、文の趣きはその変化が底知れぬ。源がふかければその流れはいろいろに分れ出で、根が拡がればその穂は高くぬけ出るものだ。そこで文章のすぐれたものに秀と隠とがある。隠とは文外の曲致であり、秀とは篇中の卓抜なるものである。

注　「隠なるものは文外の重旨也」とある。文外の重旨とは、辞は簡約であるが、その意味は深いもの、所謂含味無窮のもの（范注）であろう。又「篇中の独抜」とは、その一篇の中の特にすぐれた文句、即ち一篇の警策であろう。

隠はその意味が複雑であるのがいいのだし、秀はそのことばが抜け出ているのを巧みとする。これがつまり古来文章の美しい成績、才情の見事なあらわれなるものである。いったいどういうものを隠というか、と言えば、その意味するところが文字に書かれたものの奥にあり、秘められた響き、かくされた情采がおのずから感得されるものである。それはちょうど易の卦の中に互体があって変化し、川の流れに珠玉が蔵されているようなものだ。だから易の互体は爻を変化させて陰陽老少さまざまの象を形成し、珠玉は水にかくれて、水面にさざなみが自ら方円をあらわすようなものなのだ。

注　互体とは、易の上下の卦を交わらせて変化をとるもの。上下の卦について象を取るだけで足れりとせず、二爻より四爻まで、三爻より五爻までの象をとって解することがある。

ここにいう隠とは、ことばの奥に隠れた言外の味をいう。いわば表現の彼方にあるもの。秀ほ篇中にあって、特に目立つ秀句だと

すれば、つまり隠された意味の美しさと、現われたことばの美しさであり、表現の美と、その奥にかくされた深い意味とをいうのであろう。

「朔風秋草を動かし、辺馬帰心有り」とは、寒気きびしく、事情ほ傷ましく、旅にある身の怨みを詠った曲である。およそ文集の中ですぐれた篇といっては十の一にみたず、一篇の中のすぐれた句といっては百の二にすぎぬ。いずれもその思いの自然に発して得たもので、慮を研めて求めたものでほない。

或はことさらに分りにくく書いて文の深味を出そうとしているものがあるが、之は「奥」というべくして、「隠」ではない。彫飾を凝らして技巧をあらわすものがあるが、之は「美」はであっても「秀」ではない。

注　「或有晦塞為深、雖奥非隠」の八字、鈴木博士の校勘記によれば、嘉靖本、梅本、岡本本に之無し。しかしこの八字が無ければこの章は対を為さぬ。

故に自然に妙を得ることは、たとえば草木が美しい花を躍かすがごとく、ことさらに飾って美しくするのは、たとえば絹地を朱や緑に染めるようなものである。

朱や緑で絹を染めたのは深くてあざやかだが、草木にさく美しい花は浅くてもかがやきわたる。自然に得た秀句が文章をかがやかすのは蓋しこうしたわけである。

賛に曰く、

深奥な文章はかくれた美しさをもち、ゆたかに尽きせぬ味わいを含む。文辞の交錯するのは易の卦の交互に変化するに似る。秀でたる言葉は万慮の中に一度び得るもの。心耳を驚かして、その美しい笛の音をとおくつたえるのだ。

注　この篇中、珠玉潜水、而瀾表方円の下、「風動朔秋草、辺馬有帰心」までの間にかなりもの脱文があると思われる。そうでなければこの間が続かず、又詩の引用が唐突である。黄叔琳はこの間の脱文について、こういっている。「元の至正乙未に嘉禾で刻した者に此の頁が欠けており、その後の諸刻本は之によった。胡孝轅、朱爵儀は皆完全な本を見ていない。銭功甫（名允治、明末常熟の人。）が阮華山の宋刊本を得て補写し、それが後に銭虞山（謙益）の手に収まったが、外に伝わることが甚だ少なかった。康熙庚辰の年、何心友（義門）が呉興の商人から一旧本を買ったところ、適ま隠秀篇の全文を補写してあった。辛巳の年、何義門ほ

隠湖を過ぎ、汲古閣の書架で馮己蒼（名舒）の伝えた銭功甫本を見て、その欠字を記して帰った。その中の疎放豪逸の四字の如きほ明らかに無学の者の勝手に増加したものである。」と。

紀昀はいう、「癸巳三月、永楽大典所収の旧本を以て校勘せしに、凡そ阮本の補う所悉く之無し、然る後その真に偽撰に出ずるを知る」と、又この補った部分の文章に、梁代の劉勰の筆とは思われぬ語句があることを指摘し、これは明らかに明人の偽託であるとして、この部分を刪去した。

私の所蔵する明版梅慶生本にこの部分は欠けているが、乾隆五十六年、長州張松孫輯注本には之が補われている。

（その中に欠八字あり、注に曰う、功甫本闕八字。一本増疎放豪放四字と）

指瑕第四十一

昔、管仲ほ「翼が無くても飛ぶものは声だ。根が無くても固いものほ情だ」と言った。してみると、声は翼を借らずしてたやすく飛び、情は根を待たずしてたやすく固まる。

注　文章は容易に世に伝わり、人に記憶される。もし初めに誤謬を犯すと、千載の後まで恥を残さねばならぬ。

だから文章を世にのこすのはまことに慎しまねばならぬ。古来文士が各時代にあらわれて才を競い、或は逸才をすみやかに馳せ、或は精思を細密に働かせているが、而もその思慮はややもすれば行きわたらず、遐疵の無いものは少ない。

陳思王（曹植）の文は多くの作者の中でも特にすぐれたものだが、而もその父武帝の誄に「尊霊永く蟄す」と云い、明帝の頌に「聖体浮軽」と云った。浮軽といえば胡蝶のようだし、永蟄といえばどうやら昆蟲にまぎれるようだ。こんなことばを最も尊い人に用いて、どうして妥当といえよう。

注　曹子建の武帝の誄に「幽闥一扃、尊霊永蟄」とあり、又冬至献襪頌に「翺翔万域。聖体浮軽」とあり。顔氏家訓文章篇に「古人行う所、今世以て諱と為す。陳思王武帝誄に、遂ニ永蟄ノ思ヲ深クス、とあり、潘岳の悼亡賦に、乃チ手沢ノ遺ヲ愴ム、とあり、これ父を蟲に比し、婦を考（ちち）に匹いするもの也」

左思の七諷ほ、孝を説いて従順でない。道徳に反むくことがこのようであってほ、その余は観るに足らぬ。

注　左思の七諷の説孝の語ほ今佚して見ることが出来ぬ。説孝而不従とは、何を言っているのか分らない。

潘岳の文才は哀悼の文に得意だったが、而もその妻の兄の死を悲しんでは、「口沢に感ず」と云い、稚子の死を歎いては、「心異う如し」と云う。これは本来親の死にいうことばで、之を目下の者に用いるようでは、辞は哀しむに足りても、大義名分はすたれたものだ。

注　以上文義不当の例。

もし人をなぞらえるなら、必ず相類するものをもって来ねばならぬ。しかるに崔瑗が李公の誄を書いて、死者の行いを黄帝堯舜に比し、向秀が嵇康を賦するのに、その罪を李斯にくらべた如きは、共に当を失したものである。「ほめることは過ぎても、罪することはすぎてはならぬ」が、これでは「高原の詩、類せざる」こと甚だしい。

注　左伝襄公二十六年。「蔡声子曰く、善ク国ヲ為ムル者ハ、賞僭セズ刑濫セズ。賞、僭スレバ淫人ニ及バンコトヲ懼ル、刑、濫スレバ善人ニ及バンコトヲ懼ル。若シ不幸ニシテ過タバ、寧ロ僭ナルトモ濫ナル無ケン。」又左伝襄公十六年に「斉ノ高原ノ詩類セズ」とあり。以上比類不当の例。

凡そ巧言は目につき易く、拙辞は隠し難い。言葉のあやまちは、実に白玉の瑕よりも深い。そのさまざまの例はあるが、一々載せることは出来ぬので、ここにほぼ四条をあげておく。

注　一、陳思王が尊い者を微なる者になぞらえたこと。二、左思が道に反いたこと。三、潘岳が目下の者に対して、長上にいうべき語を用いたこと。四、崔瑗、向秀が人をなぞらえるのに不倫であったこと。

文章を作る根本の要素は、ただ文字と趣旨の二つである。文字は訓に従って正すべく、趣旨は筋を通すことによって明かになる。而も晋末の文章はその趣旨をあいまいにし、賞際奇至(至は致か。深くめずらしい趣きに感心すること)のことばはあるが、撫叩酬即(即。黄叔琳本注に謝云、当作酢とあり。岡本には即酬に作る。機鋒あることか。(原文撫叩酬即に作る。黄侃札記には無有の誤とする。このところ疑問あり。)

いつもただ一字の巧妙さを挙げて全体の評価をしている。だいたい賞という字は、功のある者に賜うと訓ずる字であり、どうして心に「会得」することに関わりがあろう。撫という字は、執握、と訓ずべきもので、何で情理などということに関係があろうか。そんな用い方は雅、頌の詩にも聞かず、漢魏の文にも見当らぬ。強いて弁解すればできようが、文章に試みては意義を成さぬ。これは実に人情が段々あやまってこんなに変って来たものであり、文が次第に衰えてこのような弊害を生じたものである。

以上字義不分明の瑕

しかるに宋以来の英才たちは、なお之を改めようとせぬ。旧習がいつか風俗となって了ったこと、一朝一夕ではないのである。近代の文人は、おおむね疑いぶかく、語をこじつけてはあらを見付け、音を飜しては瑕を見出す。そのようなことは、古にはないことだが、今日では気を付けねばなるまい。

注　范注に、反音取瑕とは高厚伐鼓の類の如き是れと。伐鼓は正面から言えばよい詞だが、語を反せば、腐骨となる。又何僧智という者、嘗て任昉の座にあって詩を賦し、その詩がその場にふさわしくなかったので、任は「郷の詩は高厚（の詩、類せず、――左伝襄十六――）と謂いつ可し」と云った。向は大いに怒って、「遂に我を以て狗弓と為すか」（高厚の反切は狗、厚高の反切は弓）と曰った。昉はあとで弁解したが、遂に諒解してもらえなかった。

又同じく范注に、比語求蚩とは、是耶非、雲母舟の如しと。梁の費旭の詩に「不知是耶非」、殷濃の詩に「飄颻雲母舟」とあり、簡文帝は曰った、旭はその父を識らず、濃又その母を飄颻す、と。耶は爺（父）に、雲母は濃母に音がかようから。（之は顔氏家訓文章篇に挙げている例）以上語音相犯すの瑕。

又自分の作った文章が、他人の文に同じければ、当然刪り改めるべきである。もし人の美辞を掠めて自分の力とするならば、宝玉大弓たりとも自分のものではない。人の作ったものをそのまま写し取るのは、掲箧（はこぐるめ）の大盗という可く、それとなくかすめ取るのは探囊の小盗に比すべきであろう。然も遠い世の文を盗むのはその罪は極めて軽いが、同時の人の文を盗むのは自ら咎を招くことになろう。

注　以上人の美を掠める瑕。

また注解の書物を作るということは、事の道理を明かに正すのが目的である。それだのになお研究に謬りがあったり、或は粗忽に断定したりすることがある。張衡の西京の賦に「中黄、育獲の疇」ということがあるのを、薛綜は之に注して宦官だと云った。これは鷲や虎を手搏にする勇士だということを知らないのである。

注　李善注によれば、中黄伯は尸子に出る勇士で、虎を手うちにしたといい、又鳥獲、夏育は戦国策に出る勇士である。

又周礼の井田の賦税に疋馬ということがある。応劭は疋を解釈して、或は馬の首や蹄を計った長さとした。これでどうして物の説明を

得たものであろうか。

注　周礼地官小司徒鄭注に司馬法を引き、「六尺を歩と為し、歩百を晦と為し、晦百を夫と為し、夫三を屋と為し、屋三を井と為し、井十を通と為し、通を匹馬と為す」とあり、正義に「三十家に馬一匹を出さした。故に通を曰いて匹馬と為す」という。応劭の風俗通に今この釈匹の文無し。芸文類聚九十三に引くところの風俗通によれば、馬が夜歩くとき、目の前四丈が見えるとか、或は馬の縦横を計って、ちょうど四丈となるとか載っている。しかしこの本文の「量首数蹄」にぴったりしない。尚説文に匹は四丈とあり。又漢書貨志に、布帛の広さ二尺二寸を幅とし、長さ四丈を匹と為すと見えている。（以上范注）

もともと古の正しい文字では、車には両と云い、馬には疋という。疋とか両とかの称え方は、それが一対になっているところから用いられる。蓋し、車には副車をしたがえ、馬には驂を並ばせるから、車も馬も一つではない。そこでその名も複数をつけるのだが、名が一旦きまると、たとえ単数の場合でも疋という。疋夫疋婦というのも又匹配の意味だ。こうした車馬のような小さい問題でも、歴代あやまって気がつかなかった。辞賦は近代の事だのに、千里の誤差を生じている。況んや経典を研鑽する場合、どうして謬りなきを得ようか。

疋の字を説明して首蹄を数えたり（原文弁言而数筌蹄。一作弁疋而数首蹄）、勇者をさして宦官としたりするごとき、道理を失うこと甚しい。故にここに挙げて戒しめとする。

注　以上注解の誤謬の瑕。

丹青の色は初めかがやいているが、後にはかわる。文章は年久うしていよいよ光る。もし今日この時に於てよく過を正すなら、千歳の後に慚ぢることがないであろう。贊に曰く、

羿（弓の名人）ですらも射をあやまり、東野（御者の名人東野稷）ですらも御をしくじる。俊才と雖も、謬れば値うちを失う。言一たび誤まてば、千載如何ともなしがたい。文章をしてあやまり無からしめば、之亦最善に次ぐものであろう。

この篇は文章を作る上の瑕瑾をあげて警告する。黄侃の札記によれば、この篇指すところの瑕は凡そ六類。

一は文義失当の瑕

二は比擬不類の瑕

三は字義依稀の瑕

四は語音犯忌の瑕
五は人の美辭を掠める瑕
六は注解誤謬の瑕